

<総評>

俳句とか川柳はどこへでも飛んでいけるのだなあと思うことがある。解釈の幅が無制限に広い。文字数が少し多く、口語という制約がある口語詩句は、そこまで自由ではない。新しい短詩形として、中間レベルの重力がどう働くか、そういうことも考えた。一方、文字数が変化する分だけユーモアの範囲も広がるようにも思えた。

ほらみて脱ぎ散らかした靴
私ちっとも変わってないよ
母さん

浅葱 愛知県

——「母」に対する視線の在り方が新鮮で現代的。

火花からひばなへ
うつるたましいの
ほたるの舌に似たあさみどり

さいう 石川県

——火花という実態のあるものから、何やら得体の知れない光に変わる。それはたましいかも知れないし、ほたるの、それも「舌」という身体かも知れない。一連の変化を無理なく納得させられる。

羽を挽ぐ
骨
のうごきを見つめれば
此世の森に揺れる野葡萄

さいう 石川県

——身体の摂理から発する動きは、この世の秘密の森に育つ野生の葡萄かも知れない。

見るからに心因性のカタツムリ

松下 誠一 東京都

——痛みを道連れにするユーモアはこの作者の特徴だろう。見られているのはカタツムリ

か自分が。

栗ひとつ自己完結と言う重さ

田崎森太 神奈川県

——栗というのはどこにいても動じない完結性を持っている。窪みに寝ても、池に落ちても。

Tシャツをめくって
おなかに入れてみる
ビーチボール、ほんの出来心で

汐見りら 東京都

——自分が女であるということをくすぐってみる。自分も周りも。

伸びずともながいうどんを食べな
がら寿命が尽きたあの話だ

雲理そら 大阪府

——「ながいうどん」と、長いか短いか切れるかも知れない寿命の話はスリリングだという発見。

十六夜に河童歩きの母を追う

蝸牛 奈良県

——「母」とは不可解な生き物だが、十六夜の月の下で、何かに変身しようとしている。母と河童の付け合わせが新鮮。

夢で聞くと
声が野太いまんじゅしゃげ

桜庭 紀子 和歌山県

——ひょっとすると川柳だろうか。あのすらりと細身の少女のような花が、実は野太い声だったとは。夢には隠れた本質が現れるときがあるが、案外、土に隠れた根茎も太いかも知れない。

けんけんにぱのない世界蚯蚓鳴く

檜野 美果子 宮城県

——「けんけんぱ」で完結するはずが、ストップモーションのように完結しない世界。次はどうなるかも分からない現在。蚯蚓も鳴くしかないだろう。

梨挽いで空は自由にさせておく

絵巻 東京都

——有ったものが無くなっただけで自由になることがある。

とうもろこしを

両手で持とうとすること

前川 友萌香 兵庫県

——確かに、とうもろこしを食べるとき思わず両手で持つことが多い。気づきの面白さだ。

しりとりのいつでも自殺できる

こと

背腹 鳩太 北海道

——これも気づき。「ん」になれば終わるのだから、これは自殺だ。

アノニマス

常盤松なら

しぐれ酒

松下 とら 大阪府

——たぶんアルコホリックアノニマスのことだろう。アルコール依存症ともいう。トキハマツという音の類似と、時雨れるという、やや陰鬱な季節の雨と酒がぴったり。

なあ君の狂気は林檎の蜜のところ

ええ貴方の愛は松の葉の先端

山口 みな 兵庫県

——語りかける調子のよさは詩/歌の起源そのもの。

満ち潮で流れてくるのしらたまが

海中汁粉はふところの海

にわ 栃木県

——時計ならわかるが、なぜ汁粉が懐中か。持ち運びができるという意味だろうが、「海中」となると白玉が流れてきたりする。

ティーパックをよじれた糸が回し

て 指に伝わるあの世の感じ

林 淳 大阪府

——自分の身体が心もとない結果、どこにいるのか方角も重力も分からぬ。「あの世」とティーパックの新しい関係。

前も後ろもわたしたちが

勝手に決めたものだな

簪を当てながら

芭川良 東京都

——前後左右という基準も私たちがこの身体をもとに決めている、いわば勝手なもの。かんざしを一本引き抜けばはらりと崩れるものなのだ。

敬老の日の金網のうすみどり

茜崎楓歌 東京都

——何の変哲もない祝日、変わったこともない窓の金網。赤でも黄でもよいはずだが、なぜか一律に薄緑、これが世界。そして誰にも平等に訪れる老い。